

桜友会報

題字・安倍能成書 昭和33年10月1日 第1号より

桜友会に寄す 安倍能成

人生には思いがけないことが多い。私が学習院長になったなどもその一つである。私は田舎中学の秀才として、世間並みに一高入学を志したが、ちょうど私の入学した明治三十五年秋に、一高の野球部は早稲田、慶応に負けて天下無敵を誇れなくなった。今もそうだが昔からスポーツには関心の薄い方で、別に悔しくも思わなかった。当時駒場の東大農科大学で、毎秋市内高等、専門学校の徒競走、——私立は仲間入りして居なかったようだが呼物になって居り、中にも学習院(当時高等科までがあった)と一高との争覇が人気の焦点であったが、今は故人の三島弥彦君——万能選手で野球の投手、柔道の有段者でもあった——が居て一高は齒が立たなかった。私の新入生の時に駆り出されて、総員飯田町から汽車を借り切って、新宿だか原宿だか(忘れたが)に運ばれたものであった。撃剣では二条君兄弟が小兵ながら中々旨く、それに道具の立派なのに驚いた記憶がある。学習院とは運動部で互いに往来があったらしく、私も寮に居た一年は時々試合を見るとやはり面白かった。

話が横にそれるが、一高は夏目漱石の在学頃から、一橋の高等商業(今の一橋大学)と向島で短艇競漕をやたらしく、漱石の同級中村是公などもたしか選手の人であった。しかし私達の時の校長狩野亨吉先生は、対校試合の弊害を認めて断然それを中止した。全寮茶話会で生徒が七、八人代る代る烈しい詞でその復活を主張しても、当の校長は莞爾としてそれを聴いて居るばかりであった。そこで私の在学中に実現された苦肉の策は、一高、高商、学習院、附属中学四校連合の柔道試合であった。多分それは明治三十七年の秋であつたろう。大塚の高師講堂で行われ、初の五、六組が両方とも附属、学習院の混合で、審判の嘉納治五郎さんが心得て居て居てちようどそこで引分にし、後は純粹に一高、高商の勝負になるという仕組が計画通りに実現され、一高の副将の次に居た同級の山上岩二が相手の副将、大将を討ち取り、一高の勝利に歸した。私はその頃落第して貧しい親から学資を送ってもらうのに気が引け、アルバイトに日本新聞の運動記者をやつて居たが附属、学習院が引分になった所を、「まさに四校連合の形破れて、二校対校試合の実成れり」というような文句を書いたものである。ともかくにも学習院と一高との間にはスポーツの交渉はあつたが、私自身には関係がありそうで殆どなかった。

「白樺」が出て以来、今も志賀、武者小路、長与の諸君、それから故人の児島君と親しくなつたが、これが頑張つて学習院出身者との数少ない近づきであつたろう。

私は山梨院長の諄々たる仙台弁の勧告にうかうかとのせられて、学習院を引き受けただけけれども、山梨さんの「経済上の御心配は決してかけません」という保証は、その正反対になり、私のようなこいう経験の皆無な人間は全く困ってしまった。今まで山梨さんに会つて、冗談半分に二、三度不平を口にしたことがあつたけれども、これからはそれを言わない決心である。戦敗で一番打撃を受けられたのは旧学習院の創立者維持者だった皇室であり、次いで学習院出身の旧華族であつた。その為に学習院は私立学校になり、今まで皇恩に忝れて贅沢な教育を受け、安閑な日月を送つて来たのと違つて、主として学生の授業料に依存し、全く自前でやつてゆかねばならぬことになった。卒業生の中には「学習院の名は同じだが、我々の居た時とは全然中実な違つた別の学校だから、学習院のことは知らない」という人もある、といううわさも耳に入ったが、これも間接の話だし、一応已むを得ぬことと腹も立たなかつた。

降服後学習院の理事として協力してくれた出身者には感謝するが、こちらには人は頼まれぬ、自分にたよる外はないという肚があったせい、私に対して積極的な意見をしてくれる人も少なく、意見をしてくれる元気のよい出身者には、私はあまり耳を傾ける気にもならず、そういう人々も次第に姿を没して、私は誇張していえば無我夢中にこの私学出発後の十年を過ごして、幸いに学習院はつぶれもせず、まあいくらか成長して来たという実情である。私がかどうかこの十余年間学習院に務め得たのは、多くの国会議員などの如く、この位置を自分の利益と権力の踏台とする意志が毛頭なかったからである。もしこいういう志が少しでも起これば、私は一日も自分でこの位置に居たたまれなかったであろう。しかし学習院は初等科から大学まで数々の科があり、殊に大学は新米大学ではあるが、学習院全体の繁栄の為にもこれに力を入れる必要があるとはいえず、大学以下の各科の正当な要求も無視するわけにもゆかず、設備の上待遇の上から直接間接の不平等は多く、横暴なワンマンだとか、何をいっても受けつけない頑固おやぢだとかいわれることもあり、或る若い教授の如きは酔った勢いで、私がやめるのを待つ外はないなどと面と向って放言したりしたが、私は不幸にしてその教授とは私自身に関する意見を同じうしないので、呪われてもまだ暫くは在任するであろう。日本の敗戦からの復活は存外早く、建設も浮華の中に着々進んでは居るが、明治の初以来人材を実業界に送った慶応や、政界に野党議員や新聞記者を長い間送った早稲田などの、今日の大を手軽く実現するわけにゆかない。又、商売として長い陰忍の末裔大富裕になった神田辺の私立大学と栄華を競うわけにもゆかない。成るべく量よりも質と心がけて独自の存在理由を有する学校にしたいとは思いますが、志高くして体力も知略も手腕も足らず、期待には副い得ないであろう。しかしこれからは自分を持つ傲慢を打破して、学習院の同僚及び関係者と事を共にする精神で、一意学習院の充実をはかり、今後に亘る基礎的方針を樹立したい。老若の桜友会諸兄弟の倍旧の支持と協力を仰ぐ。

〈原文のまま〉

【編注】十八代院長 安倍能成(あべ よししげ・昭和四一年六月七日没・享年八十二歳)

在任期間 昭和二十一年十月十八日〜昭和四十一年六月七日

墓地は東慶寺(神奈川県鎌倉市山ノ内、北鎌倉駅近く)にある。

